

研 修 機 関	いしかわ動物園
研 修 期 間	平成17年11月1日～11月30日
所 属 ・ 氏 名	石川県立鶴来高等学校 中田 博之

I 研修目的

- ・学校現場と異なる職場を経験することで、社会的視野を広げ、人間性や社会性を高める。
- ・公的施設での接客などを通して、サービスの提供者として生徒のニーズに応えていく方策を模索する。
- ・動物とのふれあいを通じて、理科教員としての資質向上を図るとともに、研修成果を現場での指導に生かす。

II 研修内容

1 ふれあいひろば（11月1日～11月9日）

- ① ウサギ、ミニブタ、馬（ポニー）、羊の飼育業務
- ② ペンギンの飼育業務
- ③ カピバラの飼育業務
- ④ 「ふれあいタイム」の補助

2 動物学習センター（11月10日～11月16日）

- ① 「生き物発見塾」の補助
- ② 図書コーナーの書籍の整理

3 アフリカの草原、ゾウの丘、チンパンジーの丘、オランウータンの森

（11月17日～11月23日）

- ① キリン、シマウマ、エランドの飼育業務
- ② ゾウの飼育業務
- ③ チンパンジー、オランウータンの飼育業務

4 アシカ・アザラシたちのうみ（11月24日～11月30日）

- ① アシカの飼育業務
- ② アザラシの飼育業務

III 研修成果

「いしかわ動物園」では、毎日8時30分より事務棟で全体朝礼を行っている。

担当動物により仕事場が異なるため、その日に従事する職員が全員顔を合わせ、お互いに情報を共有する大事な役割がある。具体的には、園長より最近の動物園を取り巻く社会情勢や動物園に携わる者としての心構え、来園者数の推移などについての話がなされたり、当直者から前夜の異常の有無について報告がなされている。

1 動物の飼育

動物の種類により、飼育の仕方に違いはあるが、すべてに共通していたのは、「できる限り動物にストレスを与えない環境づくり」を念頭に置いていることだった。野生動物にとっ

て、人の手によって育てられること自体かなりのストレスになっているので、飼育員の方々はせめてそれ以外の部分ではストレスを与えないよう努めていた。

また、動物園というと、「臭い」とか「汚い」というイメージがあるが、実際は、「清潔」で「整理整頓」が徹底されていた。まず、動物の寝小屋からフンやエサの残りなどを取り除き、その後水を使ってきれいにし乾燥させ、すみずみまで「清潔」にされていた。もちろん寝小屋だけでなく、放飼場、展示室、エサの準備をする調理棟、堆肥舎などでも同様に常に「清潔」について心がけられていた。さらに、掃除のときに使った道具や動物のエサなど、作業に必要なものが整然と整理されていて使いやすい状態になっていた。こうすることにより、動物が病気になることを防ぐことができるし、作業効率を向上することにつながっている。

このような「清潔」と「整理整頓」は、学校現場においても重要なことであると思う。学習環境を整えることで、良い学習効果を生み出すことにつながるのではないかと感じた。

2 教育活動

「ふれあいひろば」では、お客さんが直接ウサギに触れることができる「ふれあいタイム」という時間がある。子ども達の膝の上にウサギを乗せてあげると、何とも言えないくらいうれしそうな表情をする。ウサギの耳の大きさや鼻の形、足の形などふだん近くで見られないものをよく観察できる良い機会になっている。さらに、ウサギに直接触れることで、体のぬくもりが伝わったり、ウサギの心臓の鼓動も伝わってくる。このような体験を通して、子ども達が「命の尊さ」なども感じるができると思った。

また、毎月、学習センターが主催する「生き物発見塾」という企画があり、今月のテーマは、「動物たちの能力ウォッチングー人間と比べてみようー」というものだった。職員は、説明するとき、参加者にフクロウの羽とタカの羽を振ってもらい、音がするかしないかを比べてもらったり、カバの潜水時間をストップウォッチを使って測定したりしていた。参加者は、実物を見たり、触れたり、実際に時間を計ったりすることにより、理解を深めているようだった。今後、授業においてもできる限り生徒が「体験できる授業」を心がけようと思った。

3 チームワーク

今回、「ゾウの丘」など6コーナーで研修をさせていただいた。動物の飼育に休日はないので、飼育員同士でローテーションをうまく組みながら仕事をされていた。自分が担当する動物だけでなく、休務職員が担当する動物についても飼育をする「代番」というものがあった。そのため、各動物についての飼育日誌が詳しく記入されており、それを見れば前日の動物の様子がわかるようになっていた。

「ゾウの丘」では、直接飼育員がゾウの体に触れる「直接飼育」を行っていた。今まで、ゾウはつぶらな瞳でかわいく、おとなしい動物だと思っていたが、実は危険動物に指定されていると教えていただいた。ゾウを移動させたりエサを与えるときには、ゾウの体に触れながら指示を出す人、ゾウをつなぎ止めてある鎖を外したりエサを与える人、それを見届ける人、さらに飼育担当者以外でまわりから監視する人の計4人が常に携わっていた。このように、危険動物であるゾウの扱いについて、細心の注意を払って行われていることがわかった。

園内にいる動物の大半は野生動物であるので、予想しない事態が起こる可能性は十分考えられる。そこで、グループ内で飼育日誌を通じて情報を共有したり、ゾウの場合のように担当者が一致団結して飼育に当たる必要がある。このように常に、チームワークが重要であることがわかった。教育現場においても、生徒の指導について情報を共有化し、職員全体が協力して指導に当たることの重要性を再認識することができた。

4 トレーニング

「アシカ・アザラシたちのうみ」では、様々なトレーニングが行われており、今回、アシカのトレーニングを実際に行わせていただいた。まず、動作をさせるためのジェスチャーを教えていただき、アシカに試してみたところ、反応してその動作を行ったときは大変感激した。トレーニングのねらいをお聞きしたところ、①動物の潜在能力を引き出し、それをお客さんに見ていただく、②動物が病気になったとき、治療を施しやすいように飼育員の指示に従うようにする、ということだった。また、このようなトレーニングをどのようにして彼らに覚えさせたかお聞きしたところ、段階を踏みながら焦らず、彼らが嫌がることのないように注意して取り組んだということだった。生徒を指導する場合も明確な目標設定をして、そのために段階を踏みながら、生徒の個性などを考え、彼らの小さな変化も見逃さず、励ましながら最終目標に向けて指導していくことが大切だと思った。

5 環境への配慮

エコ動物園として「いしかわ動物園」は、「リサイクル」、「資源の有効活用」、「二酸化炭素の抑制」の取り組みを行っていた。

例えば、園内から出てくる動物のフンやエサくずなどは、堆肥化プラントによって有機肥料にし、草食動物のエサとなる青草栽培に活用されている。また、雨水の利用も行われており、動物舎の洗浄、樹木の散水、トイレなどに利用されている。さらに、園内の荷物の運搬や獣医さんの移動には、「電気カート」や「電気自動車」が利用され、学校においても、教室や特別教室の電気をつけっぱなしにしたり、無駄な水を使ったりすることがないように気をつけるなか、環境保全を意識した取り組みをさらに進めていく必要性を強く感じた。

IV 今後の課題

今回の研修では、大変貴重な経験をたくさんさせていただいた。今まで学生時代のアルバイト以外で学校以外の職場で働いたことがなく、1ヶ月という長い期間学校を離れて研修をするということ自体今回が初めてだった。毎日見るもの聞くものすべてが新鮮だった。職員の方々からは、休憩時間や仕事が終わった後にも、動物のことや最近の動物園の情勢などについて興味深いお話を聞かせていただいた。また、逆に学校のことを聞かれることも多く、それに答えることでもう一度学校を見つめ直すことが出来たり、良いアドバイスをいただいたりすることが出来た。

今までインターンシップの事前指導の折りには、生徒に対し本やインターネットなどから得た情報だけで話をしていた。これからは動物に関わる職業に関しては、実体験をもとに話すことが出来るが、それ以外の職業についてもなるべくその職業に携わっている人から得た情報をもとに話をしていきたいと思った。また、今回の経験から、生徒がインターンシップで実際に職場を見たり、体験することが大きな意味をもつことがよく理解できた。受け入れ先の企業はどれも忙しい業務の中、引き受けてくださっていることを考えると、実習は何を目的として行うのか担当者とはよく打ち合わせをして実施することにより、より成果が得られると感じた。また、実習に出かける前に、もう一度自分の学校についても人によく説明できるようにしておかなければいけないと感じた。

最後になりましたが、この研修を行うにあたり、細やかな配慮で研修計画を組み立ててくださった園長さんをはじめ職員の皆様と、この研修の機会を設けてくださいました石川県教育委員会、石川県立鶴来高等学校の皆様へ深く感謝申し上げます。